

復
興
記
錄

▽復興年譜△

— 医学部関係 —

昭和二十年八月九日原子爆弾被爆、学長角尾晋以下教職員学生生徒八百五十余名殉難、校舎病棟倒壊炎上す。書類罫冊機械器具その他一切の施設また灰燼に帰す。市内興善町新興善小学校々舎を仮收容所とし患者の診療を開始す。同月教授古屋野宏平学長事務取扱に、教授調来助附属医院長に、教授高瀬清附属図書館長に、各々補せらる。同月下旬大学本部を一時商工会議所内におき、ついで九月下旬長崎経専校舎に移して再建事務を開始す。九月四日勅使久松侍従来学「復興に努力しよう」とのお言葉を賜わる。同月文部属白方元次事務官として着任。十月五日進駐米海軍及陸軍衛生官の斡旋により当時の泰山院長の協力を得、元大村海軍病院において診療並びに講義を開始す。十一月二日大学合同慰霊祭を執行、文部大臣前田多門弔辞をおくる。同月本部を新興善小学校々舎に移転し同時に附属医院として、残存の原爆患者其他の診療を医師会に代り大学の手で行う。十二月二十二日教授古屋野宏平学長に補せらる。

昭和二十一年五月大村市より諫早市永昌町進駐軍駐跡(元海軍病院)に移転を開始し新興善を第一、諫早を第二附属医院として七月患者の診療を始め。九月附属医院焼跡の整理に着手。本年度中に調理所並に伝染病棟(計四六〇坪)の応急補修工事をなし学生寮として学生を收容す。尙外来本館補修工事に着手す。

昭和二十二年三月三十一日附属医専廃校。四月一日特設長崎高等学校設置さる。五月三日眼科病棟を清掃し憲法發布実施記念祝賀式を挙行す。七月五日教授高瀬清依願附属図書館長を免ぜられ教授横尾安夫図書館長に補せらる。九月本部の一部、主として庶務課及び用度係の一部を新興善より移しました基礎医学教室旧外来本館に復帰す。十月二十五日復帰式を挙行す。十一月十二日グピロが丘慰霊碑除幕式を挙行す。本年度中病院外来本館(一、一三七坪余)中講堂及び北講堂等戦災復旧補修工事竣工。

昭和二十三年一月二十三日学長古屋野宏平退任し、教授高瀬清学長事務取扱を命ぜらる。九月教授横尾安夫依願附属図書館長を免ぜられ、教授頼尊豊治図書館長に補せられる。本部会計課新興善より移転復帰す。十一月十二日創立記念九十周年記念式を挙行す。十二月六日教授高瀬清学長事務取扱を免ぜられ、学長に補せらる。同月二十八日教授調来助附属医院長を免ぜられ、教授広瀬金之助附属医院長に補せらる。本年度中内科病棟(九五五坪)皮膚科病棟(四二三坪)眼科病棟(四三四坪)及び小児科病棟(四四三坪)の復旧補修工事及び看護婦寄宿舎(三七七坪余)新営工事竣工す。

昭和二十四年五月二十七日天皇陛下臨幸あり、内科病棟屋上より復興状況御視察。五月三十一日国立長崎大学設置包括さる。高瀬清医学部長兼任となる。六月二十九日高瀬清長崎大学長に補せられ医科大学長兼任となり、医学部長を免ぜられ、八月三十一日教授影浦尙視医学部長に補せらる。六月事務官白方元次大阪大学に転出。本年度中附属病院結核病棟(二五八坪余)精神科病棟(三四七坪余)及び汽缶場等復旧補修工事

竣工。

昭和二十五年三月三十一日特設長崎高等学校廃止となる、四月旧制最後の入学式を行う。同月寺島存事務長として着任、五月高瀬清医科大学長兼補を免ぜられ、学部長影浦尚視医科大学長に兼補せらる。十月附属病院事務部並びに臨床各教室(附属病院各科)新興善小学校々舎より移転復帰し、新興善は外来患者診療所となる。十二月三十一日教授広瀬金之助附属病院長を免ぜられ、教授和泉成之附属病院長に補せらる。本年度中耳鼻科病棟(四五七坪余)外科病棟(八三七坪余)産婦人科病棟(四四一坪余)等復旧補修工事竣工。

昭和二十六年四月新制医学部(専門課程)第一回入学式を挙行す。基礎医学教室焼跡の整理に着手す。十月一日影浦教授学部長兼学長を免ぜられ、教授和泉成之学部長兼学長に補せらる。同月同日教授和泉成之附属病院長を免ぜられ、教授三谷靖附属病院長に補せらる。本年度中看護婦宿舎(二〇九坪余)及び病院附属建物等新営工事竣工。

昭和二十七年十二月三十一日教授三谷靖附属病院長併任終了す。本年度中基礎医学教室第一棟の一部(三三二坪余)新営工事竣工す。病院中央廊下(五三三坪余)の新営工事竣工。精神病棟にエスカレーター取付工事等竣工。

昭和二十八年一月一日教授辻村秀夫附属病院長に併任される。三月三十一日教授和泉成之医学部長兼学長併任終了し、四月一日教授北村精一医学部長兼学長に併任される。同月三十日教授頼尊豊治附属図書館長併任終了し、五月一日教授友永得郎図書館長に併任される。基礎医学教室の中両生理学教室及び管理部(事務部)新営第一棟に外来本部より移転

を終る。本年度中基礎医学教室第一棟の一部(五六九坪余)新営工事竣工す。

昭和二十九年三月六日長崎医科大学最後の卒業生八十八名を送る第二十九回卒業式を挙行す。昭和二年第一回卒業式以来約一、六三〇名を世に送り、三月三十一日を以て長崎医科大学(研究科のみ当分存続)は廃止となり新制大学医学部に全面的に切替えられる。二月二十八日事務長寺島存退任し、文部事務官一ノ瀬秀人事務長事務取扱を命ぜらる。十月一日一ノ瀬秀人事務長事務取扱を被免、文部事務官有浦厚事務長を命ぜらる。基礎医学教室の中生化学及び薬理学教室外来本館より移転を終る。本年度中基礎医学教室第二棟の一部(七三七坪)新営工事竣工す。

昭和三十年一月一日教授辻村秀夫附属病院長併任終了し、教授和泉成之附属病院長に併任される。三月十日医学部第一回卒業式を挙行し八十八名に卒業証書を授与す。四月一日教授北村精一再選されて医学部長兼長崎医科大学長に併任される。基礎医学教室中細菌学教室、衛生学教室、公衆衛生学教室、及び法医学教室、外来本館より移転を終る。八月九日原爆十周年祈念式を挙行し、記念碑(旧正門々柱)の除幕式を挙行す。本年度は基礎医学教室第三棟(約一、〇〇〇坪)建築工事(新営)の予定である。

原爆後十年間の薬学専門部 並に薬学部のみ

薬学部教授 高 取 治 輔

昭和二十年八月九日広島に続いて第二の原爆は不幸にも浦陵原頭中空に炸裂した。直線距離一杆の母校附属薬学専門部はその一閃と共に後輩の若い学徒数十名と杉浦孝教授他事務小使諸氏の鮮血と共に一切を灰燼に帰した。時の部長江口虎三郎教授は医大在学中の御長男宏君を原爆の犠牲に供え乍ら悲痛の中にも応急の措置として母校を佐賀市に收容された。燃し乍ら終戦直後の混乱時期ではあり筆舌に絶する江口部長の努力も苦心も予期の成果を見ず再び長崎復帰の一縷の望みを抱いて昭和二十二年一月諫早市外小野村の旧航空機乗員養成所跡に仮移転したのである。終戦迄ジャカルタ医科大学薬学部に勤めた私は更に一ヶ年半を英軍蘭軍に使役して漸く同年の二月一日に復員して来た。

現地で浦上駅北方に原爆投下死傷六万長崎の大半が壊滅し其の跡はアトム・フィールドと称し飛行場を使用して居るとの簡単な報道ではあつたが、其の被害の如何に大きいかは予め想像して来たのであるが二月二日の晝近く道の尾附近からの車窓よりの一年半後尙ほ焼野原の惨憺たる光景に当時の惨状を想い声を呑んだ次第である。遇々小生の復員の報にお訪ね下さつた江口部長と共に二月五日初めて小野村の薬学専門部を訪れて見た。

此所小野校舎も校とは名ばかりで全く資材施設もなく二百の学徒は只徒らに日を過して居る有様である。

幸にも母校に復転を許されて、江口部長辞任の後を承けた一番ヶ瀬部長代理と共に、時の医大古屋野教授に窮状を訴え資材設備の整備を懇談したが医大自身壊滅状態からの復興に窮々たる有様で薬専を省みる余裕もないのが実際の状況であつた。

時恰も新学制の発足に伴い専門学校は将来新制大学に昇格する事を前提として文部省は全国的にその資格の査察を行う事となつた。先づ粗上にあげられたのは戦時中乱立した臨時医専である。その結果全国で長崎医大臨時附属医専他一校が四月には不幸にも廢校の憂目を見たのである。行方なく四散する医専の学生の姿を眼前に見せられた我々は此儘で行けば彼の運命は又明日の我が立場と深い心痛に落ちざるを得なかつた。

学生は遂に頼る可き何物もない事を知り爰に自ら立ち上つたのである。即ち五月中一ヶ月間の休暇を申出で「我々の実習資金だけでも自分達の手で」と街頭に車内にと大衆に呼びかけて汗と油で集めた金が約二十万円であつた。而も全学年で集めた此の貴い金を一、二年生は「我々は後で何とかなる是非卒業も近い三年生で之を使つて一つでも二つでも実習をやつて呉れ」と真に涙ぐましい友情を披瀝したのである。之を以て三年生は僅かに薬学教育の最初歩である定性分析の実習を行う事が出来たのである。如何に当時の困窮が言語に絶するものであつたか想像願えると思う。當時を追憶しては本文を草し乍らも尙瞼に涙のじむものがある。

万策を尽すも四囲の状勢は附属なるが故の不利の立場と原爆による一

物も残さぬ戦災と長崎市に出るのさえ一日がかりの交通不便の僻村と日と共に加わる戦後社会情勢の不況により如何ともなし難く此儘では長崎薬専の再興は何人と雖も達し難いとの結論に到達せざるを得なかつたのである。

我々は爰に於て廢校に備えて「学生の生きる路」を真剣に検討したのである。

即ち八月五日全教官学生の会合を催し右の情勢に就て検討し且つ審議した結果、予ねて聞及んで居る創設計画中の九州大学薬学科に於て九大当局の意向は勿論不明であるが若し幸にも長薬の窮状に同情されその学生を收容願えれば之が残された唯一の活路であるとの意見に一致したのである。我々の教官の真情は身を捨てて学生の活路を拓いてやる、その為めには我々の身分に關しては一切の条件は附けない事を申合せたのである。

右の決定は父兄会並に長薬同窓会の賛同と激励を得て文部省薬学審議会及び九大当局に対して「長薬の九大併合」の猛運動を展開したのである。

十一月二十九日文部視学官上井直博士は単身長崎薬専査察の爲め來諫され校情調査の結果終にB校の判定を下されたのである。

此儘過ぎれば廢校との警告を受けたのである。此の頃から漸く薬専門は衆目の注意する所となり親校医大及び長崎県市当局はその存置運動を展開した。

越えて二十三年二月七日文部省は九大医学部と長崎医大及び薬専の実情再調査の爲め薬学審議会から菅沢博士（東大）篠原博士（山之内製薬）

上井視学官、臼井文部事務官の一行を派遣した。此の再調査の結果は三月に薬学審議会に報告され、同会は十五対二の絶対多数を以つて長崎薬専の九大併合を支持する旨を文部省に答申した。同じ頃長崎県会は全員協議会を開いて薬専整備を含む医大復興費として一千万円の寄附支出を可決し薬専存置運動は益々猛烈となつた。

三月の情勢はこのような最後の段階迄進んで居たにも拘らず文部省の決定は延々となつて遂に四月十三日P. H. W. の要請で最後の決定を迫られた文部省は薬専、医大、長崎県、査察官を召集して「長崎医科大学附属薬学専門部に關する緊急措置」を裁定して八月十五日迄に文部省が示す最小限度の復興計画の履行を条件として薬専を暫定的に現地に存置させる事となつた。但し八月の査察迄に右条件が完備されない場合は即時廢校で九大併合等は考慮しないと云うのである。この慌しい四ヶ月間に長崎県当局の尽力により実験台が据付けられ薬品が揃い試験管も何とか振れる状態に迄復興した。此の四ヶ月の急設の後八月十八日実に三度目の査察官として湊博士（千葉大）平野博士（明大）桑田博士（武長）竹内氏の四専門委員を迎え辛じて薬専としての最低規準を充すものとして廢校の悲運から免れる事が出来たのである。

然し難關は之を以て突破した訳ではない、引続き次に迫つた問題は即ち新制大学への昇格である。

十一月二十日川上登喜二先生を静岡女子薬専から部長としてお迎えして先生の御構想により着々その準備に着手したのである。

十二月二十九日大学設置委員刈米博士（京大）の査察を受け川上先生の御努力の結果種々の条件付ではあつたが合格の内定を頂いたのである。

昭和二十四年五月三十一日国立長崎大学の発足に当り永年の長崎医大附属の絆を断つて、医学、経済、水産、学芸の四学部と肩を並べて薬学部として独立発足する事となつたのである。

新制大学はその機構上一年間は教養科目を履修する立前上、薬学部第一期生は大村長崎の半教宛に分れて夫々教養部に就学した。

予ねて小野村の僻地から長崎市内への復帰を念願して居た薬学部にとってはこちらもない機会が訪れたのである。

西浦上在の旧県立男子師範の校舎は師範学校が学芸学部として長崎大学の一環に含まれたため其の校舎は当然長崎大学の所管になつて居たのであるが戦後男子師範の大村旧聯隊跡移転後は忘れ去られた形になり新学制による西浦上中学校が創められて居たのである。長崎市より文部省に対しその払下げの申請が出て大学当局も初めて此に気が付いたと云う様な次第で、今日考えられない様な混乱した時代ではあつた。

大学として不用なら市へ払下げるとの本省の話に驚いて五学部長会議に其の利用方法が提案されたのである。

川上学部長は薬学部の現情を述べられてこれこそ薬学部の長崎復帰の絶好の場所である事を力説されて全会一致の賛同を得られて六月正式に薬学部の長崎移転の大計が確立したのである。川上学部長の御努力に対して我々は衷心より敬意と感謝を捧げるものである。

而し校舎は貰つたものの、中にあつた西浦上中学の移転先は無い。爰に於て、我々は高瀬学長、福井局長、守屋会計課長の援助を得て地元西浦上有志の説得により更に協力を得て長崎市当局並に教育委員会と共に、西浦上中学校建設運動を起した。

数回にわたる本省の現地視察、県市大学地元側の陳情を重ねる事一ヶ月漸く二十五年六月に六三制予算の決定により、中学建設費の半額国庫補助に次いで七月に市会で半額市起償を可決して中学側の見透しがいつたのである。

此れより先教養一ヶ年の履修を了えた一期生は五月から夫々の学部引取る事となつたが来た長崎市に何等の拠点もない薬学部は彼等を小野校舎に收容する他は途は無い有様であつた。私は新制薬学部は旧制薬専とは別途に此際は他に場所を借りても長崎市内で発足して貰い度い旨を川上部長に進言して幸い御諒解を得て比較的餘裕のある校舎を持たれる経済学部懇願して伊東学部長の御同情と浅野教授の御理解により同学部内に四教室一実習室を貸与して頂く事になり辛くも新制薬学部は五月二十五日から片淵町長崎大学経済学部内の一廊から出発したのである。尚ほ小野校舎には薬専最終のクラスが卒業期を控えて就学して居る有様であつたが、十一月末諫早市長中島太郎氏は小野校舎の薬専閉鎖後、警察予備隊を誘置する方針で運動中であるが、明年三月迄は待てないの一月迄に引払つて貰い度いとの申し入れであつた。

我々は諫早市の希望を入れて二十五年一月末に引渡し態勢を整えたが、市側の計画進まず薬専三年生は居坐りのまま小野で三月に所定の課程を終了したのである。此等の学生の卒業式は小野校舎で挙行の計画であつたが、私は薬専最後の卒業生となる五十八名は同窓として之れから後に続く新制薬学部の学生との繋ぎ目に当る深い意味を持つ事を考え彼等の母校は西浦上に薬学部として永遠に繁栄し続ける事を目を以て見て行つて貰い度いとの念願から卒業式だけは是非西浦上で挙行して頂き度い旨

を川上部長に進言して三月二日高瀬学長、影浦医大学長臨席のもとに、新制薬学部学生総代の送辞と、薬専卒業生総代の謝辞により爰に新旧の固い繫りを結んだのである。

此より先二十五年十二月から西浦上校舎東側片袖に着工した。第一期補修工事二百五十坪は二月末に薬剤衛生分析の三実習室が完成した。

前年八月二十五日隣接地に起工した西浦上中学のコンクリート新校舎は此の三月竣工予定の所工事の大遅延で何月になるかも解らない有様である。

我々は中学の新校舎移転を待たず或る期間は中学との合世帯でもかまわぬ既定の方針通り第一期補修の完成を機会に薬学部を経済学部より移転する計画を強行する事として連日各方面と折衝し、遂に四月七日西浦上校舎に落ちついたのである。

想えば原爆被害後佐賀に諫早にと苦難の途を辿つた母校も爰に始めて安住の地を得て西浦上の地に嘸じり着く事が出来たのである。

四月九日には新に教養部を了えた第二期生を迎えて初めて西浦上で始業式を挙げた。

一方遅延に遅延を重ねた西浦上中学校の新校舎も漸く十一月二十三日に竣工落成式を挙行した。実に予定より八ヶ月遅れである。

爰に始めて中学との合世帯は解消したので其の退去の跡に直ちに第二期補修工事を施行した。即ち本館西側片袖三百坪で一階薬品化学、二階生化学、三階生薬の各実験室である。此の工事は翌二十七年三月完成した。

川上学部長はかねて部長交代の御意向を表明されて居たが、六月二十

六日教授会で後任者の互選の結果不肖高取が二代学部長を承く事に決定した。

七月十日夏期休暇に入るを待つて本館右半分二百三十五坪の第三期補修工事に着工した。

一方昭和二十四年来二年越し絶えず交渉し続けて来た住吉薬学部間千二百米の瓦斯管引込問題も漸く八月四日話合がつき、十月十三日に竣工したのである。殆ど日を同じうして第三期補修を完成し補修総坪数八百八十坪となつた。

戦前の浦上附属薬専校舎が七百五十坪であつた事を思う時爰に實質的にも戦前以上の薬学部となつたのである。二十九年度は幸にも長崎市の厚意により別棟百四十五坪の講堂の補修を行う事が出来た。

最後に残された部分は本館左半分の直撃爆弾の被害箇所二階三階のフロアを吹き飛ばされ、大支柱は曲つて居ると云う大破ぶりで一番の難工事の場所である。此の第四期補修工事の難工事は今迄と異り相当費用が嵩むとの見込で文部省もなか／＼着工して呉れなかつたのである。

而し二年間の辛棒強い陳情が漸く効を奏して六月十四日私と平井事務長と上京して直接に本省に当ると共に本多、中島、馬場の三代議士の御後援により二十八年度は長崎大学としては医学部基礎の継続事業と分校移転で一ぱいである。薬学部の事情は本省でも解り過ぎる位解つてゐるが、本年一年辛棒して呉れ其の代り二十九年度は残りの爆弾大破箇所を必ず補修するからとの確約を貰つたのである。

八月二十五日任期満了により高取は学部長を辞し、代つて梁井教授が三代学部長に就任した。

十月五日予ての約束により本館大破箇所二百七十坪の第四期補修工事に着手し三十年三月二十五日に完成。尙お一部の附帯工事を残すのみであるが此も本年八月頃着工予定である。

戦後爰に十周年を迎え歩んで来た跡を追想する時長い様な気もするし短い様な気もして懐いは複雑である。

何とか苦勞の甲斐があつてここ迄復興した薬学部を若くして世を去つた原爆被害の青年学徒の御靈に捧げる事が出来た事を衷心より感謝するものである。

然し建物施設が如何に完備しようとも、大学に取つてそれは第二次的のものであつて、大学の本体は教授陣である。此の第一次的教授陣の強弱こそ其の大学の声価を左右するものである。眞の薬学部の復興は此所にあると思う。

今一応の型は出来上つたのであるが今後一層我々教官の努力精進によつて此の点を強化し他校に劣らぬ所まで行き度いと念願するものである。

(昭、三〇、八、三)

(本文は薬学部庶務係長藤山祐一氏に纏めて頂いた事を感謝します)